

C-15 Ciaglia Blue Rhino™を用いた PDT (Percutaneous Dilational Tracheostomy) の検討

和歌山県立医科大学救急救命センター

高江洲秀樹 篠崎真紀 久岡崇宏 島幸宏

中敏夫 川崎貞男 友渕佳明 篠崎正博

【はじめに】われわれは平成13年よりCook社製Ciaglia Blue Rhino™を用いたPDT (Percutaneous Dilational Tracheostomy)を導入したのでその使用経験を報告する。【対象および方法】平成13年5月から平成14年2月までの10ヶ月間に当施設入院の患者のうち気管切開を要する症例全例に対し、Ciaglia Blue Rhino™を用いた気管穿刺による気管チューブ挿入を施行した。対象患者は35例(男性23例、女性12例)であった。挿入は患者担当の臨床研修医が施行し、ICU専属医がこれを指導するものとし、手技に要する時間、合併症について検討した。【結果】手技に要した時間は皮膚切開から気管チューブ挿入までが平均6分8秒であった。気管チューブ挿入に伴う合併症(頸部の挫傷が2名(5.7%)、気管チューブ挿入部周囲の血腫が2例(5.7%)、皮下膿瘍1例(2.9%)であり、いずれも保存的治療で軽快した。内科系疾患および外科系疾患に分けて検討すると、内科系疾患15例(40.0%)、外科系疾患21例(60.0%)であり、それぞれの疾患群での気管チューブ挿入の施行時間に有意な差はなかったが、合併症の頻度は外科系疾患で23.8%と多かった。全体としての合併症の頻度は14.3%であった。【考察および結論】全体の手技に要する時間は平均6分8秒であった。従来の外科的切開法に比べて手技の熟練を必要とせず気管チューブの挿入が可能であった。文献的には、外科的切開法に比べて気管切開に伴う合併症も低い傾向にあることが報告されており、外科的切開法における合併症の発生率が約45%であるのに対して、で平均12%台の合併症の発生率であるとする

報告がある。今回のわれわれの経験でも合併症の発生率は14.3%であった。以上よりCiaglia Blue Rhino™は従来の外科的気管切開や、順次、切開孔を拡張していく穿刺気管チューブ挿入法と異なり、1回の拡張手技で気管チューブを挿入可能であり、迅速かつ安全に気管切開が行えるPDTキットであると考えられた。